ゲーテ『ファウスト』における諦念

平　松　智　久

『ドイツ文学論集』第47号別刷
日本独文学会中国四国支部
2014（平成26）年10月

ゲーテ『ファウスト』における諦念

平松　智久

1．序

本論は，ゲーテの『悲劇ファウスト第二部』「第五幕」における「救済」の問題について自然学的な観点から捉えた近年の解釈に風穴を穿つ可能性を探る試みである。[1)]

『実伝ファウスト博士』と題した民衆本が1587年に出版されて以来，ファウスト博士の生を描いた「ファウスト文学」と呼ばれる作品群は現代に至るまで数多く発表されてきた。「ファウスト文学」は基本的に，悪魔との契約によって欲望に駆られた博士が，結局は，その契約がゆえに悲惨な最期を迎えるという構造がひとつの型である。しかし，後述するように，啓蒙主義期にレッシングがファウスト博士の「救済」案を発表して以来，少数ではあるが最後にファウストを救う肯定的な結末を描こうとする挑戦的な作品も現れた。ただし，それらの多くは構成的に筋の破たんをきたしており，完成作と呼びうるものはない。それゆえ「救済」の結末を完成させたのは，『第一部』

1）本稿は，2013年11月２日に日本独文学会中国四国支部学会第62回総会・研究発表会（於 松山大学）において同題目で口頭発表した内容を加筆修正したものである。
　本稿のために使用した一次文献からの引用の際には，以下の省略記号と頁数ないし詩行数（Verszahl）を記す。

WA　Goethe, J. W. v.: Goethes Werke. Hrsg. im Auftrage der Grossherzogin Sophie von Sachsen. Abteilungen I-IV. 133 Bde. (in 143). Weimar 1887-1919. (Weimarer Ausgabe) [Dsgl. fotomechanischer Nachdruck: München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1987]

HA　Goethe, J. W. v.: Werke. Hrsg. v. E. Trunz. 14 Bde. Hamburg 1948-1964. Sonderausgabe München: C. H. Beck Verlag 1998. (Hamburger Ausgabe)

MA　Goethe, J. W. v.: Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens. 21 Bde. (in 26). München: Carl Hanser Verlag 1985-1998. (Münchner Ausgabe)

FA　Goethe, J. W. v.: Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche. 40 Bde. Frankfurt a. M.: Deutscher Klassiker Verlag 1985-1999. (Frankfurter Ausgabe)

LA　Goethe, J. W. v.: Die Schriften zur Naturwissenschaft. Abteilung. 1. u. 2. Barb. v. Rupprecht Matthaei, Dorothea Kuhn u. a. Weimar 1947ff. (Leopoldina Ausgabe)

V.　Verszahl aus Goethes Faust: Goethe, Johann Wolfgang von: *Faust-Dichtungen*. Texte. Hrsg. von Ulrich Gaier. Stuttgart 1999. (Reclam)

　引用原文を訳出する際には『ゲーテ全集』（潮出版社）を参照したが，一部改変した箇所もある。
　なお，以下の論述において，『悲劇ファウスト第一部』と『悲劇ファウスト第二部』をそれぞれ『第一部』，『第二部』，両書を併せた全体の完成作品を『ファウスト』と略記する。

の最後においてグレートヒェンの最期を「救われたのだ」(V.4611) と明記し,『第二部』最終場「山峡」においてファウストの昇天を描き出したゲーテの『ファウスト』が初めてであるとされる。とはいえ,「救済」されたと断定するには『ファウスト』全体において問題が複雑に絡み合って残されており,解釈も多様で,決定的な定説には至っていない。

そこで本論ではまず,特に1990年以降のファウスト文学研究史における「救済」をめぐる叙述を概観しながら整理したい。近年の研究は,道徳的および倫理的な観点,人生哲学的な観点,そして自然学的な観点の三点に大別されよう。なお,1990年以降に焦点を絞るのは,ゲーテ生誕250年以降のこの四半世紀,とりわけゲーテの自然学が再評価されるようになり,その観点からも改めて『ファウスト』の解釈を見直す必要が生じているからである。これまでの自然学的な観点からの研究は,叙述形式の分析に執心するあまり「救済」の問題には関与してこなかった。その点を補完するために本論は,『ファウスト第二部』「第五幕」における視覚的表現の意義に着目することによって,それらの間隙を埋める解釈の可能性を探る。「第五幕」の「宮殿」から「夜更け」,「真夜中」へと場面は次第に暗くなり,ファウストは「不安」によって盲目にされる。しかし,目の見えなくなった暗闇のなかで,〈諦念〉こそがファウストの心に明るい光を照らし出す。この〈積極的な諦念〉と呼びうるイロニーにこそ「救済」を読み解く鍵を見出しうるであろう。周知のとおりゲーテ文学において〈諦念〉は,『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の副題にも「あるいは諦念の人びと」として挙げられているとおり,とりわけ晩年の作品において非常に大きな意味を持つが,紙幅の都合上,本論では『ファウスト』における叙述に限定して,ゲーテ自然学の光を頼りにその意義を「救済」問題との関連において取り上げる。その目的は,ゲーテの『ファウスト』に投影された詩人自身の自然観,作品に叙述された,光と闇,明と暗,見えることと見えないことをめぐる自然学的な描写のドラマトゥルギーを明らかにすることであり,また,そうすることによって『ファウスト』における「救済」の問題に新たな観点から迫る可能性を問うことにほかならない。

2．ファウスト文学における「救済」の問題

ゲーテの『ファウスト』における「救済」の意義を明示するために,ファウスト文学における「救済」の叙述に関して概観しよう。現代に至るまで約５世紀にわたるファウスト文学の展開は,民衆本『実伝ファウスト博士』(1587) に端を発する。『実伝』というのはモデルがいたからである。そのモデルとなったファウスト博士とは,1480年ごろに南部ドイツのクニットリンゲンで生まれ1540年ごろにシュタウフェンで悲惨な死を迎えたらしい歴史上の魔術師

ヨーハン・ファウストゥス（あるいはゲオルク・ファウストゥス）のこと。同書は，それ以降に引き継がれる一つの文学的原型を生み出した。その原型とは，〈無限の知識を求めるファウスト博士が悪魔と契約を結び，不可能なことを可能とする力を獲得して富，権力，栄誉，享楽を望むままに享受するが最後には悪魔との契約の期限を迎えて神の劫罰を受ける〉という形式である。16世紀にできたこのファウスト伝説は，国と時代の境界を越えて様々な観点から繰り返し語られてきた。この民衆本の影響はドイツだけに留まらず，1588年の英語版，1592年のオランダ語版，1598年のフランス語版，1611年のチェコ語版等の翻訳はいずれも版を重ねられている。その人気は，民衆本に着想を得たクリストファー・マーロウ（1564–93）が，早くも『実伝』の２年後に，戯曲『ファウストゥス博士の悲劇的物語』（1589成立，1604刊）を公刊したことからも明らかであろう。シェイクスピアと同年生まれのマーロウは，中世神秘劇から性格悲劇へ発展させた点でファウスト文学に大きな足跡を残すことになった。それ以来，ファウストないしファウスト的人生を主題に掲げる文学は，世界文学のもっとも重要な主題として現代に至るまで国と時代を越えて小説，詩，劇，人形劇，映画など様々な形で展開している。18世紀ドイツでは，マーロウの作品を原作とした人形劇が逆輸入されて，人気を博した。そのような状況下でとりわけ重要な展開が，啓蒙主義期，疾風怒濤期のドイツに現れる。市民階級が教養と知識によって社会的束縛から解放される憧れをファウストの姿に見出したレッシングの挑戦であった。『文学書翰』（1759）に掲載されたレッシング（1729–81）の『ファウスト断片』が，ファウスト博士の「救済」の可能性を初めて示したのである。そのなかで博士の悲惨な死は夢だったという結末を迎え，ファウストの命は助けられた。ただし，完成原稿は発見されておらず，現存する原稿だけでは未完の断片に留まる。完成した作品という意味では，レッシングから大きな影響を受けたゲーテ（1749–1832）の『ファウスト』まで待たねばならない（第一部1808／第二部1833）。

では，なぜ「救済」がとりわけ問題となるのか。それは，レッシングやゲーテ以前のファウスト文学では総じて，何事も節度を保たなければ悲惨な運命は免れないという『実伝』の宗教的教訓に基づいていたのに対して，レッシング以降，飽くことのない知的向上への精進に明るい光を見出した点で近代におけるファウスト文学の「救済」概念に意義の転換が見られるようになったからである。そこには，フランシス・ベイコンの定義した「知は力」という近代ヨーロッパ文明の根本原理にファウスト文学の主要テーマが大きく関わっている。事実，ファウスト伝承に語られる逸話は，ほとんどすべて科学技術の発展によって現実化してきた。空中飛行や宇宙旅行という空想，映画やテレビのような映像幻術，遠距離輸送や一夜城建築というスピード技術な

ど，ファウスト文学に描かれた人類の夢は科学技術の発展とともに実現している。ただし人間の限界を越える科学力は，悪魔との契約の上に成立する危ういものであることがすでに当初から示唆されていることを忘れてはならない。

ところで，ファウスト文学において「救済」を正当に描いたのはゲーテだけであったといえよう。何物にも妨げられることなく活動し続けるファウストの姿は，疾風怒濤期の諸作品において高く評価されるようになり，古典主義期のゲーテの完成作において理想化されたのである。たしかにシンク（1755-1835）の作品をはじめ，ゲーテ以外にも，最後にファウストを救うものもないわけではない。しかし，それらには説得力をもった動機づけが欠けていた。また，ゲーテ以後のファウスト文学も，ゲーテの影響を全く受けていないものはなく，「救済」を新たな時代の光に照らして叙述しえた作品は皆無である。市民階級の進歩的発展を越えた19世紀には，シャミッソー（1781-1837），グラッベ（1801-36），ハイネ（1797-1856），インマーマン（1796-1840）らもファウストに関して著作を残した。また，二つの世界大戦を経験した20世紀には，自己のうちに内包する矛盾を戦争以外の形で解決できない市民的社会制度の本質を暴露し，人生の真の価値，人間存在の真の目標への反省を促すことを主題としてトーマス・マン（1875-1955）が『ファウスト博士』（1947）を上梓した。マンの著作は，確かにゲーテの『ファウスト』以降の作品において質量ともに抜きんでている。しかしそこでも「救済」は描きだされていない。それゆえファウスト文学において「救済」の結末を完成させた作品のなかでは，ゲーテを唯一無二の頂点と認識するほかなかったのである。

3．従来の解釈史

とはいえゲーテの「救済」に関しても，解釈は開かれており，定まることがない。2011年に公刊されたリューディガー・ショルツの『ファウスト研究史』のなかでは次のようにまとめられている。

> なぜゲーテが主人公ファウストを，生涯にわたる精進を理由に救済したのか，真紅，緑，楽園の鮮やかなる華麗さをもって天上へと行かせたのか，そしてそこで即座にあの世のさらに上方の階層へと昇らせたのかということを説明せねばならないとき，常にファウストの劫罰（Verdammung）が問題となる。だが主人公の罪と栄光の矛盾は，解釈者には解き難い。ドラマと作者の極めて高い気風（エートス）に依るからだ。[2)]

2） Scholz, Rüdiger: Die Geschichte der Faust Forschung. – Weltanschauung, Wissenschaft und Goethes Drama. Bd. 2. Würzburg 2011, S. 756.

『ファウスト』の「救済」の問題は，「解釈者には解き難い」問題であるにもかかわらず，近年も相変わらず様々な形で解釈が試みられている。「好奇心，知識，成長という名目のうちにはそもそも道徳上のためらいはありえず，それゆえに，この振舞いに救済を与えるゲーテの決心が可能となったのだ」[3]とアレクサンダー・ボルマンが2000年にファウストの無罪を主張したかと思えば，翌年2001年にはハンス・ルドルフ・ヴァジェが「彼に罪がないなら，そもそもなぜファウストは救済を必要とするのか」[4]と反論したように。そもそも主人公ファウストの「救済」は，「天上の序曲」の場で主と悪魔が交した「賭け」によるもので，その「賭け」自体が「ヨブ記」を下敷きにしていることは明らかである。この観点から『ファウスト』という悲劇全体がヨブ記のテーマに基づくと見なしたヨハネス・アンデレックは2007年の論考のなかで，ファウストの「救済」が「ヨブ記」に合わせたものだと説明している。[5] これらの見解はいずれも道徳的，倫理的観点から「救済」の問題に迫った見解である。

それに対して，「救済」の描写に関しては，「山峡」の場面を「生物学的・宇宙論的な生成と捉えうる」[6]とリヒャルト・マイアーが自然学との関連で2000年に言及した。この観点からはマイアーに続き，2007年にアストリダ・オルレ・タンティーヨが「ゲーテの科学的原理がキリスト教信者の道徳的基盤に取って代わる」[7]と宣言して，道徳的観点とは全く異なる議論を展開した。2010年にはヒーター・I・サリヴァンが，フランクフルト版ゲーテ全集におけるアルブレヒト・シェーネの注釈にならって，「山峡」がゲーテの『気象学』に述べられた雲の研究に基づくという自然学的解釈を発表している。[8]

しかし以上の解釈に共通しているのは，ファウストが「救済」に至るまでの昇天の道のりに焦点を絞るあまり，「山峡」の場面が中心として論じられている点である。この点に気付いたウルリッヒ・キットシュタインは2006年に，「山峡」の場面を無視するという極めて単純な方法で，ファウストの「救

---

3) Bormann, Alexander von: Zum Teufel. Goethes Mephistopheles oder die Weigerung, das Böse zu denken. In: Bernhard Beutler, Anke Bosse (Hrsg.) Spuren, Signaturen, Spiegelungen. Zur Goethe-Rezeption in Europa. Köln u.a. 2000, S. 563-579, hier S. 572.

4) Vaget, Hans Rudolf: „Neue Wege zu Goethes Faust?“ In: Colloquia Germanica Vol. 34, Tübingen 2001, S. 57-64, hier S. 63.

5) Anderegg, Johannes: Schöpfungslob und Himmelfahrt. Goethes „Faust “ und die Geschichte Hiobs. Zürich 2007.

6) Meier, Richard: Gesellschaftliche Modernisierung. Freiburg 2000, S. 230.

7) Tantillo, Astrida Orle: Damned to Heaven: The Tragedy of Faust Revisited. In: Monatshefte. Vol. 99. No. 4. Madison 2007: University of Wisconsin Press, S. 455.

8) Sullivan, Heather I.: Ecocriticism, the Elements, and the Ascent/Descent into Weather in Goethe’s *Faust*. In: Goethe Yearbook. Vol. 17. New York 2010, S. 55-72.

助（Rettung）」や「救済（Erlösung）」について論じることを止めるべきだと主張した。[9] キットシュタインによると，ファウストの弾劾は将来の幻像をみて死を迎えるところで終わっているから，それ以降を論じる必要がないというのである。さらに，ヴァジェはもっと過激に，以下のように断言する。

> 誰が今日でもなおファウストの罪について語るだろうか？ 奇妙なことに，とりわけ非ドイツ的観点からは，ドイツのファウスト文学におけるこの問いが不作法なものと見なされ，間違いとされているのだ。[10]

いまやファウストの精進（Streben）こそが高く評価される。ロルフ・クリスティアン・ツィッマーマンはゲーテの『ファウスト』が，もはや「道徳哲学的（Moralphilosophisch）」ではなく「人生哲学的（Lebensphilosophisch）」であると断言する。[11] そして，ヴィルヘルム・エムリヒが定式化した「偉大なる行動的生命力の実存的責務」というファウストの罪の問題に関しては，すでにペーター・フーバーが解決案を公表し，「ファウストの魂の救済は，人間的本性を理想的なものにまで高める上昇能力の表現である」と定式化した。[12] そのような考えはゲーテの『ファウスト』に留まらない。フーバーは，決して歩みを止めないファウストの姿に近代性の萌芽を認め，彼の冤罪をもって現代が夢見る明るい未来を示唆するのである。ゲルハルト・カイザーはさらに，道徳的な罪の問題について，「ファウストは確かに罪を犯したが，悪のために悪さを行ったわけではない。それは“錯誤（Irre）”にほかならないのだ」と前置きしたうえで，「魔術師ファウストもまた，恩寵の救済（Heilung）が必要な，道を踏み外した世界的代表者だ」[13] と言う。果たしてそこまで敷衍することができるかは更に議論が必要だろうが，ファウストの「救済」を精進に帰しうるのか，また，それがどのように行われるのかという結末は，マッテュー・ベルが言うとおり，「開かれたまま」であることは確かである。[14]

9） Kittstein, Ulrich: Göttliche Allmacht und ewige Dauer? In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft. Bd. 50. Göttingen 2006: Wallstein Verlag, S. 80-106.

10） Vaget, Hans Rudolf: Neue Wege zu Goethes Faust? In: Colloquia Germanica Vol. 34, Tübingen 2001, S. 57-64, hier S. 61.

11） Zimmermann, Rolf Christian: Goethes „Faust“ und die „Wiederbringung aller Dinge“. In: Goethe Jahrbuch. Bd. 111. Weimar 1994, S. 171-187, hier S. 184.

12） Huber, Peter: Die Originalität der Goetheschen Teufelsfigur. In: Faust-Jahrbuch. Bd. 3. Bielefeld 2007/08, S. 121-131, hier S. 139.

13） Kaiser, Gerhard: Ist der Mensch zu retten? Vision und Kritik der Moderne in Goethes „Faust“. Freiburg 1994, S. 91.

14） Bell, Matthew: Sorge, Epicurean Psychology and the Classical “Faust”. In: Oxford German Studies 28. Oxford 1999, S. 109.

以上のとおり，ゲーテの『ファウスト』における「救済」の問題は近年，道徳的には「救済」の対概念である「断罪」の有無が問題とされており，人生哲学的には「精進（Streben）」が「救済」に値するのかが問題とされてきた。また，自然学的叙述形式との関連で捉える考察に関しては「山峡」のみが論じられる傾向にある。また，キットシュタインのように，「山峡」を無視して「救済」について論じることを止めるべきだという見解すら出現しているが，「山峡」よりも前の場面について自然学的観点から「救済」の問題に迫る論考は見あたらない。そこで本論では，「第五幕」の「山峡」よりも前の場面に焦点を絞り，ファウストの「救済」に至る道を自然学的な観点から捉えなおす可能性を探ることが課題となる。

４．自然学的解釈の試み

『ファウスト第二部』最終幕である「第五幕」は，旅人がバウチスとフィレモン老夫婦を訪ねてくる「開けた土地」の場面で始まる。この場面は，かつて旅人らを荒々しく翻弄した海が今や「農園」（V.11085）に変えられ，「地上の楽園の姿」（V.11086）になった成り行きが老夫婦の口から話される。第四幕で戦勝国の皇帝から与えられた海辺の領地において，領主であるファウストがメフィストーフェレスの魔力を借りて干拓を進めており，今は老夫婦の住まう場所を所望しているという。しかし，老夫婦はその土地から離れて新しい土地に移ることを断る。

フィレモン：
しかしご領主〔ファウスト〕は
新しい陸地の素敵な土地をおすすめ下さっているではないか！
バウチス：
水に浮かんだ土地なぞ信じなさんな
丘の上にある自分の土地を大事にしよう。
フィレモン：
さぁ礼拝堂へ行こう。
最後の太陽の眺めを見に行こう。
鐘を鳴らし，跪き，祈りを捧げよう。
そして昔どおりの神を信じるのだ。
（V. 11135-11142）

老夫婦が礼拝堂から眺めようとしている「最後の太陽」は，もちろんその日の日没の意味に違いない。しかし実際にはそれが彼らの人生で最後の日没

となってしまう。次の「宮殿」の場でファウストがメフィストーフェレスらに老夫婦の「立ち退き」を命じるのだが，老夫婦はその言葉に耳を貸さず，強引に立ち入った悪魔たちが「夜更け」の場で旅人と老夫婦らを死に至らしめてしまうからである。「第五幕」は冒頭からファウストが死を迎える時まで，太陽が輝く夕刻から闇が支配する深夜に向かって時が進み，どんどん辺りは暗くなっていく。だが，明暗に関わる描写だけが最期の時の内実を表すわけではない。昼のうちは工事の音が騒々しいが夜になると小さな鬼火が集まって朝には堤防が出来上がる，その工事の為には血を流し人柱にされた人もあったに違いない，とバウチスは言う。この干拓の様子の報告もまた「第五幕」における重低音となっているのである。というのも，「闇の一部」（V. 1350）の同行者ファウストが後に「自由な民」（V. 11580）のための人柱となる，その最期を暗示していると捉えられるからである。

さらにバウチスの言葉には，信心深い老夫婦と，「神を信じない」（V. 11131）ファウストとの対比が，前者が「丘の上にある土地」に長く暮しているのに対して後者が「水の上に立つ土地」を新たに作り出すという両者の立場の違いにおいて表現されている。一方は長時間をかけて自然が形成した堆積地であり，他方は悪魔的な力で急速に作られた人工的な干拓地である。前者に関しては第四幕冒頭「高山」でメフィストーフェレスが開陳した山岳生成史とファウストの考え（V.10075-10121）を，後者に関しては第五幕「宮殿の大きな前庭」で悪魔が呟く「海の悪魔ポセイドン」（V. 11546f.）の存在を忘れてはならない。両者の対比には，人間が自らの力の及ぶ限りで活動する自然の領域と，人間の肉体的限界を超えるような近代自然科学的技術力による人工の領域との対立を看取することもできるだろう。自然の力は，人間自身の力の及ぶ限界内では大きな助けとなるが，限界を超えると自らを滅ぼす暴力となりうる。かつては旅人の命を薪の炎で温めて救ったフィレモンとバウチスであったが，「夜更け」の場で彼らは，領主の命令をあまりにも素早く行動に移した悪魔たちの炎によって命を奪われることにもなってしまった。効率を追い求めすぎて管理が及ばなくなると自然の力は氾濫し，人間自らの身を滅ぼす危険性を高める。自然と人工の対立の描写には，ゲーテ自身が当時の近代自然科学の急速な発展に対して抱いていた不安が顕在化しているのである。

さらに，晩年のゲーテは，自然と人工の対立の境界に生じる「不安」を自然科学技術による暴力的な発展速度の脅威に対してだけでなく，それよりも深い意味で感じていた。ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767-1835）に宛てた生涯最後の書簡（1832年３月17日付）のなかで，『ファウスト』の詩人は，「非常に真面目な冗談」（WA Ⅳ49, 283）と呼ぶ自作の命運についても，さら

に内的な「不安」をこぼす。同書簡のなかでゲーテはまず，「自己の自然な素質」（WA Ⅳ49, 281）とそれを「順調に向上させる手職や技術」（WA Ⅳ49, 281）という，「無意識」と「意識」の存在（WA Ⅳ49, 282）に言及し，それに続けて，「人間の器官が，訓練，教え，思索，成功，失敗，励まし，反対，そしてまた思索を繰り返すことによって進歩するものだが，そのような人間の器官が，無意識に自由な行動をしながら生得のものに後天的なものを結びつけ，ついには世を驚かすような統一体を生み出す」（WA Ⅳ49, 282）という見解を述べる。これはゲーテが60年以上の歳月をかけて「完成する意図を常にそっと心の片隅に懐きながら，自分が最も興味を惹かれる箇所を一つ一つ仕上げてきた」（WA Ⅳ49, 282）自作の，『第二部』執筆に関する心的態度を表明するものにほかならない。「もともと自在に活動する自然な本性のみがなすことを，計画的に意欲を駆り立てて成し遂げなければならなかった」（WA Ⅳ49, 282f.）『第二部』執筆に際しては，非常な困難が生じていた。そのような詩作の過程で生じた「後天的なもの」については読者からの理解がすぐには得られないはずだという「不安」が,「浜辺」に打ち上げられた「難破船の残骸」の例えで表されるのである。

> 今日の情勢はまことに不条理，混乱を極めておりますから，この奇妙な建物〔『ファウスト』〕に注いだ多年にわたる私〔ゲーテ〕の誠実な努力も，報いられることなく浜辺に打ち上げられて，難破船の残骸のように横たわり，さしあたりは時間の砂に埋もれるに違いないと思っております。（WA Ⅳ49, 283）

「浜辺」は，陸と海の対立，「丘の土地」と「海の上に立つ土地」の対立，自然と人工の対立の間隙に存在する場所である。そこに立脚して「時間の砂に埋もれる」に違いない「不安」に駆られながらもなお，ゲーテは同書簡の最後で次のように所信を表明する。

> 紛糾した世の営みをますます紛糾させるような説が横行している現代に，私としては，私が失わずに持っているものをできるだけ高め，私の固有な持ち物を純化することを最大の関心事としたいと思います。
> （WA Ⅳ49, 283）

まさにこの詩人の言葉は，ファウストの最期の決断を根底から支えている力なのではなかろうか。ファウストは自然を前にして自らの望みを口にする。

ファウスト：
自然よ！お前に面して独立独歩の男として立てたなら！
そうすれば人間であることに労を厭わぬ価値があるだろうに。
（V. 11406f.）

ファウストはここでメフィストーフェレスの魔力圏から離れ，自立することを望む。そして，「第五幕」の「夜半の刻」の場面で「灰色の四姉妹」の一人である「不安（Sorge）」がファウストのもとへ訪れるや，ファウストのそのような気持ちはさらに強くなる。

ファウスト：
地上のことはもう十分に分かった。
天上を見やるわれらの視線は行き惑うだけだ。
愚か者め。瞬く目を上へ向け
雲の上に自分に似た存在がいると妄想するとは。
しっかりとこの場に立って自分の周りを見回すのだ。
有能な者にはこの世界が黙っていない。
永遠の境へとあてもなく彷徨うことは必要ない。
この世界で認識することならば理解できる。
この地上の日々はそのように生きねばならない。
悪霊どもが現れても自分の道を貫くことだ。
自ら進む道の先にこそ苦痛も幸せも見つかるだろう。
それこそが！ どの瞬間にも満足せぬものの生き方だ。
（V. 11441ff.）

これは『第一部』冒頭「夜」の場面において博士が抱いていた，〈悪魔の力を利用してでも上から下まで全てを見たい〉という望みとは正反対であろう。人間として自らの限界を認識し，不可能なことは諦める。これは最後に彼がたどり着いた〈諦念〉にほかならない。だがそのような〈諦念〉こそが，逆に，彼に自由を与えたのも事実である。〈諦念〉に到達したからこそ彼は，メフィストーフェレスとの契約関係からも離脱することが可能になったのだ。悪魔との契約を反故にすることができなければ『実伝』以来続く「悲惨な死」という結末は避けられなかったはずである。ゲーテはこのファウストの「救済」を光と闇のドラマトゥルギーのうちに，見えることと見えないことの狭間に，自然学的，視覚的な表現で語っている。それが決定的に顕現するのが，ファウストの盲目化だ。「不安」がファウストの目を見えないよう

にするのである。

　不安：
　人間は生涯，盲目なのです。
　さてファウスト！　お前も最後にそうなるが良い。
　（V. 11497f.）

「全てを見ること」を望んでいたファウストにとって「目が見えなくなること」は絶望的な状況に違いない。しかし,「独立独歩の男」であるために〈諦念〉を選択したファウストにとっては，逆に，この「不安」の言葉こそが彼が「人間」という存在であることを高々と宣言することになる。「盲目」になるという否定的な表現がここでは意味を肯定的に逆転する。それがファウストの悪魔からの解放を示唆し，彼を「救済」に至る道へと導くことになるのである。だからこそファウストは，次のように続けて言うことができるのであろう。

　ファウスト（盲となって）：
　夜闇が深く，ますます濃く入り込んできたようだ。
　だが心の内には明るい光が照らしている。
　（V. 11499f.）

　闇が深くなればなるほど，同時に，光の明るさも際立つことになる。このような意味の逆転は，「宮殿前の広大な庭園」の場面における干拓事業についてもイローニッシュに表現されていた。ファウストが掘らせている「堀（Graben）」は，メフィストーフェレスの目には「墓（Grab）」にほかならないが，しかし，その「墓」こそが「死ぬことができる」人間としての価値をファウストに与えることになっているからである。メフィストーフェレスはファウストの行為を揶揄しながら，じつはこの時，自らの「契約」を反故にしている。「常に悪を望み，常に善をなす」（V. 1336）という彼の本質が現れているのだろうか。「宮殿前の広大な庭園」においてファウストが「最高の瞬間」を予感して倒れる，その前提が「第五幕」の「山峡」よりも前においても，自然学的な描写，光と闇のドラマトゥルギーによって描かれているのである。〈諦念〉がファウストに「救済」への光を与える。〈諦念〉なしにファウストが「救済」への光をその心のうちに感じることはなかったに違いない。たとえ「不安」によって強制的に盲目とさせられたにせよ，ファウストは，本来なら消極的にならざるをえないところで積極的な意義の転換を見

出している。その意味においてこれは〈積極的な諦念〉と呼ぶに値するだろう。ゲーテの『ファウスト』において「救済」への光を導いたのは，「山峡」よりも前における〈積極的な諦念〉にほかならない。それは，まさに自然学的および視覚的な表現でしか叙述されえない，自然学者ゲーテならではの叙述形式なのである。

Entsagung in Goethes *Faust*

Tomohisa HIRAMATSU

In der Faustliteratur nach dem Volksbuch *Historia von D. Johan Fausten* (1587) findet der Doktor wegen des Paktes mit dem Teufel ein schreckliches Lebensende. Diese Erzähltradition dauerte bis Lessing, der in seinem unvollendeten Manuskript eine Idee zur Rettung von Faust geschrieben und publiziert hat, die bekannterweise einen großen Einfluss auf die Fausttragödien von Goethe ausgeübt hat. Zwar gab es in der Aufklärungszeit einige Werke, die wagten, ein glückliches Ende für Faust zu finden versuchen, aber sie sind nicht überzeugend, so dass nach herrschender Meinung Goethe in seiner Faustdichtung zum ersten Mal die Erlösung vollendet habe. Jedoch ist das Erlösungsende noch so problematisch, dass es sehr schwierig ist, zu einer abschließenden Interpretation zu gelangen. Vor diesem Forschungshintergrund versucht dieser Aufsatz, zuerst die bisherigen Interpretationen zum Erlösungsproblem des *Fausts*, insbesondere die nach 1990, zu sortieren und dann Interpretationslücken darin zu finden.

In diesem Vierteljahrhundert gab es drei große Interpretationsstränge. Der erste ist die Diskussion um die moralische Verurteilung. Alexander Borman behauptet die Unschuld von Faust, weil der Gelehrte „im Namen von Neugierde/ Wissen/ Fortschritt überhaupt keine moralischen Skrupel“ gehabt habe, während Hans Rudolf Vaget Widerspruch dagegen erhebt: „Warum bedarf Faust, wenn ihn denn keine Schuld trifft, überhaupt der Erlösung...?“ Im Anschluss an diese Meinungen sucht Johannes Anderegg die Antwort darauf im Buch *Hiob*. Der zweite Punkt ist die lebensphilosophische Interpretation. Nach dem Begriff der „existentielle[n] Verschuldung der großen tätigen Lebenskraft“ von Wilhelm Emrich beteuert Rolf Christian Zimmermann folgenderweise: „Die Erlösung der Seele Fausts ist somit der Ausdruck der Steigerungsfähigkeit der menschlichen Natur zum Ideellen.“ Der dritte ist die Bedeutung vom Aufstieg des Erlösten in den „Bergschluchten“, der letzten Szene der Dichtung. Richard Meier und Astrida Orle Tantillo betrachten sie naturwissenschaftlich als „biologisch-kosmologisches Geschehen“. Sie interessieren sich nämlich nicht länger für die Erlösungsmöglichkeit, sondern für den Stil der Dichtung. In diesem Sinne ist die Behauptung von Ulrich Kittstein merkwürdig, dass durch die Ignorierung der Bergschluchtenszene man das Problem der Rettung und Erlösung gar nicht zu erörtern brauche, weil die Verdammung von Faust mit seiner Schlussvision und seinem Tod ende.

Frühere Forschung diskutiert das Erlösungsproblem insbesondere auf das Lebensende des Doktors fokussiert, ob er schuldig gewesen sei und wie naturwissenschaftlich dies beschrieben würde. Aber sollten wir darüber nicht nur in Bezug auf die letzten Szenen, sondern auch über diejenige davor reden? Man kann das Licht der Erlösung nicht nur im Lebensergebnis, sondern vielmehr im Prozess erkennen. Daher versucht die vorliegende Arbeit in der letzten Hälfte, den Erlösungsprozess bis „Bergschluchten" unter dem naturwissenschaftlichen Aspekt zu betrachten, unter besonderer Berücksichtigung der von Goethe benutzten visuellen Ausdrücke. Von „Offene Gegend" über „Palast", „Tiefe Nacht", „Mitternacht" und „Großer Vorhof des Palasts" bis „Grablegung" wird es draußen nach und nach dunkel. Darüber hinaus wird Faust in „Mitternacht" durch die Worte einer der vier grauen Weiber, der „Sorge", zur Erblindung gebracht. Jedoch findet er eben in seinem verzweifelten Herzen ein Licht zur Erlösungsmöglichkeit. In dieser Ironie, die wir „eine positive Entsagung" nennen dürfen, könnten wir einen Schlüssel zur Auflösung des Erlösungsproblems finden. Der Zweck dieser Arbeit ist, diesen Erlösungsprozess im *Faust* als Dramaturgie von Licht und Finsternis naturwissenschaftlich zu fassen.